



日本遺産「近世日本の教育遺産群―学ぶ心・礼節の本源―」

# 史跡 咸宜園跡



廣瀬淡窓肖像画 公益財団法人廣瀬資料館蔵



## 日本遺産に認定された 日田市の構成文化財



**長福寺本堂**【国重要文化財】  
淡窓が初めて塾を開いた寺院の本堂。当時、日田の学問の中心で、幼少時の淡窓は寺院の僧侶に学んだ。



**豆田町**【重要伝統的建造物群保存地区】  
咸宜園と共生した町並みが残る。豆田町の町人は塾生に住居を提供するなど多くの支援を行った。



**廣瀬淡窓墓(長生園)**【国史跡】  
淡窓のほか旭荘、青邨といった歴代塾主とその家族 13 人の墓。園内には「文玄先生の碑」が建つ。



**咸宜園跡**【国史跡】  
廣瀬淡窓が創設した近世日本最大規模の私塾跡。独自の教育方法が5千人を超える門下生を集めた。



**桂林園跡**  
咸宜園の前身であり、淡窓が初めて自らの塾舎を構えた場所。ここで漢詩「休道の詩」が詠まれた。



**廣瀬淡窓旧宅**【国史跡】  
廣瀬淡窓の人間形成に大きな影響を与えた生家跡。廣瀬家は財政面などで咸宜園の経営を支えた。



**咸宜園関係歴史資料**  
咸宜園の「入門簿」や「会計録」、和漢籍を中心とする蔵書など、塾の実態を明らかにする資料が残されている。

廣瀬淡窓旧宅(廣瀬資料館)は、現在、修復工事中のため休館中です。

「日本遺産」とは地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定するものです。魅力溢れる文化財群を活用し、国内や海外に発信していくことで、地域の活性化を図ることを目的としています。



平成27年度 日本遺産 初年度認定  
**近世日本の教育遺産群**  
―学ぶ心・礼節の本源―  
我が国では、近代教育制度の導入前から、武士のみならず、多くの庶民も読み書き・算術ができ、礼儀止しさを身につけるなど、高い教育水準を示しました。これは、藩校や郷学、私塾などの普及による影響が大きく、明治維新以降のいち早い近代化の原動力となり、現代においても学問・教育に力を入れ、礼節を重んじる日本人の国民性として受け継がれています。



「学びの文化」を世界遺産に  
教育遺産群の世界文化遺産登録を目指しています

## 史跡咸宜園跡案内図

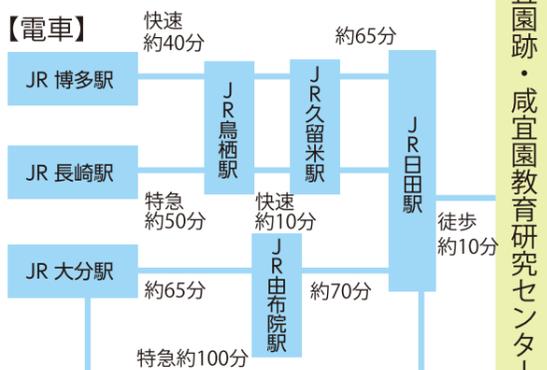


- 1 秋風庵**  
天明元年(1781)に淡窓の伯父月化が建てた居宅で、のちに淡窓など歴代塾主も利用した。茅葺一部二階建。
- 2 招隠洞跡・梅花塙跡**  
梅花塙は文政13年/天保元年(1830)に建てられた淡窓の書斎。招隠洞は天保3年(1832)に建てられた淡窓夫妻の居宅。のちに梅花塙を曳家して一つの建物とした。
- 3 遠思楼**  
嘉永2年(1849)に建てられた淡窓の書斎。詩集「遠思楼詩鈔」でもその名が知られる。瓦葺二階建。
- 4 講堂(推定地)**  
文政4年(1821)に建築され、塾主の講義や塾生らの学習の場として利用。明治30年咸宜園閉塾後破却された。
- 5 東塾跡**  
文政7年(1824)に利用が開始された塾生のための寄宿舎。明治23年、書蔵庫建設のため部材が売却された。
- 6 井戸**  
咸宜園開塾のころに作られ、その後文政3年(1820)に新しく掘り直された。
- 7 書蔵庫**  
明治23年(1890)に咸宜園の蔵書の散逸を危惧した門下生らによって建てられた。瓦葺二階建。
- 8 休道の詩碑**  
大正8年(1919)12月に日田郡教育会により建立。「桂林荘雜詠示諸生(四首の二)」休道の詩と呼ばれている。
- 9 初桜之句碑**  
淡窓の伯父月化の句碑。天保年間に淡窓の父桃秋によって建てられた。「末世とは何でいふたぞはつさくら」



【高速バス】

天神バスセンター	約90分	市役所前	徒歩 約7分
博多駅バスセンター	福岡空港	約80分	



【車】

福岡インター	約70分	日田インター	約5分
中津インター	約60分(一般道)		

**お問い合わせ**  
開園時間 午前10時から午後4時  
休園日 年末年始(12月29日から1月3日)  
所在地 大分県日田市淡窓2-2-18  
交通 JR久大本線「日田駅」下車徒歩約10分  
高速バス「市役所前」下車徒歩7分  
大分自動車道「日田IC」から5分(専用駐車場には5台駐車可能)

[TEL・FAX] 0973-22-0268  
[e-mail] kangien@city.hita.oita.jp  
[URL] http://www.city.hita.oita.jp/soshiki/kyoikucho/bunkazaihogoka/kangienkyoiku/kangien/



廣瀨淡窓と咸宜園

廣瀨淡窓は、天明二年（一七八二）豆田町の豪商で博多屋廣瀨家の長男として生まれました。文化二年（一八〇五）、二十四歳の時に長福寺学寮において初めての塾を開いています。その後は、「成章舎」「桂林園（荘）」と場所や名前を変えて、文化十四年、現在地に「咸宜園」を開きました。「咸宜」とは、中国最古の詩集『詩経』にある「殷、命を受く咸宜百禄是れ何ぞ」から来ています。「咸く宜し」とはすべてのことがよろしいという意味で、淡窓は門下生一人ひとりの意志や個性を尊重する教育理念を塾名に込めました。

咸宜園の教育

淡窓の教育の特色は、入門時に学歴・年齢・身分を問わない「三審法」に始まり、規約や塾則を設けて学習環境を整えたほか、職任制を設けて塾の運営をおこなっていた。毎月実施する試験の結果により個々の能力を評価して席序を決める「月日評」は咸宜園の代名詞です。淡窓の教育理念は、「一人を教育するは善の大なるものなり。」「再新録」より」という言葉の中によく表れています。



入門簿

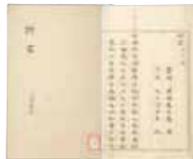
咸宜園とは・咸宜園の教育

淡窓の思想

淡窓は儒学者であったが特定の思想に偏ることなく、さまざまな学説を広く尊重しました。そして、思索を重ねた末、善いことをすれば天に報われるという独自の「敬天」思想を確立し、門下生の育成こそが自分に命じられた天命という自覚を持って、その実践のため、日々の行動を「万善簿」に残しました。淡窓の思想は、著作『約言』『析玄』『義府』などから知ることができます。



『約言』



『析玄』



『義府』

公益財団法人 廣瀨資料館蔵

公益財団法人 廣瀨資料館蔵



公益財団法人 廣瀨資料館蔵

万善簿は淡窓が敬天思想の実践として始め、一万の善を積むことを目標に、日常の行動を善行と悪行に分けて記録したものをまとめたものです。善行から悪行の数を差し引いて集計し、通算した結果、目標の一万善を達成するのに十二年七月の期間を要しました。

漢詩人 廣瀨淡窓

淡窓は頼山陽、菅茶山とともに、江戸時代後期の三大詩人の一人とよばれています。淡窓は咸宜園で詩の講義や詩作を情操教育にとり入れたほか、山や川など自然にふれては詩作を楽しむ、知人や門下生を招いては詩会を開いていました。

隈川雑詠（五首の四）

亀山宛在水中央 亀山宛として水の中央に在り  
伝是毛侯古戰場 伝ふこれ毛侯の古戰場  
画戟彩旌空一夢 画戟彩旌 空しく一夢  
蘆花乱発月蒼蒼 蘆花乱れ発いて月蒼蒼

※画戟…画をかけた戟 彩旌…いろいろた軍旗

淡窓の思想「敬天」・漢詩人廣瀨淡窓

咸宜園の歴代塾主と門下生

咸宜園では初代の淡窓を始めとして、十名の塾主により塾の運営は継続されました。明治二十年の閉塾までに全国から学んだ門下生は五千名を超える近世日本を代表する私塾のひとつでした。門下生は僧侶や医生、町人などが多く、大卒卒塾後は儒学者や教育者、医家、政治家など活躍した分野も多岐にわたります。咸宜園出身者には中島子玉や秋月橋門（儒学者）、小栗栖香頂や小栗憲一（僧侶）、高野長英（蘭学者）、大村益次郎（兵学者）、長三洲（官僚）、上野彦馬（写真家）、清浦奎吾（政治家）などがいます。

咸宜園教育研究センター

平成二十二年（二〇一〇）十月、史跡「咸宜園跡」に隣接して開館した施設です。廣瀨淡窓や咸宜園に関する調査研究・普及啓発をおこない、調査研究の成果は市民の学習や研究資料として広く公開・展示しています。また、咸宜園に関するガイドブック映像や体験学習用の教材も用意しており、関係図書などが閲覧できる研究室では収蔵品や門下生の情報等が検索できます。



咸宜園入門

ぼつくすの紹介（二級〜九級の18種類）



「一級上 かるた」「咸宜園いろは歌」



「三級下 すくすくたんそう先生の一生」

五級下 はんこ体験「淡窓先生の落款」



七級下 和綴じ体験「和綴じの本をつくる」



館内案内図



利用のご案内

開館時間 午前9時から午後5時(但し、入館は4時半まで)  
休館日 水曜日(祝日の場合はその翌日)  
年末年始(12月29日から1月3日)  
入館料 無料



「休道之詩碑」(大正8年建立)

「淡窓」名前の変遷  
淡窓とは書斎の名になみ四〇代から使い始めた号です。諱(本名)は簡のちに建といひます。字ははじめ廉卿、のちに子基、号は淡窓のほか、峇陽、遠思、樓主人などを用いています。幼名は寅年生まれなので寅之助、通称は求馬、一時は玄簡を名乗っていました。没後は「文玄」と諡されています。



月日評

廣瀨淡窓と咸宜園年表

元号西暦	年齢	おもなできごと
延宝元年(一六三三)	数え年	廣瀨家の始祖五左衛門が筑前博多から豊後日田へ転住
天明元年(一八〇一)	1歳	父月夜が秋庵を建てる
天明二年(一八〇二)	2歳	秋庵に於て母に嫁して養育される
天明三年(一八〇三)	3歳	12月、妹アリのちの秋子誕生
天明四年(一八〇四)	4歳	6歳実家に戻り、父から読書習字を学ぶ
天明七年(一八〇七)	7歳	父から「孝経」「四書」を学ぶ
天明八年(一八〇八)	8歳	冬、長福寺法幢上人から「詩経」を学ぶ
寛政二年(一七五〇)	9歳	松野元俊から「書経」「春秋」から古文真宝を学ぶ
寛政三年(一七五三)	10歳	松下西洋から詩文を学ぶ
寛政五年(一七五五)	12歳	高山彦九郎から「蒙求」「漢書」「文選」等を学ぶ
寛政七年(一七五七)	14歳	4月、佐伯遊学
寛政九年(一七五九)	16歳	1月、内山安妻の養子となり、福岡亀井塾に入塾
寛政十二年(一八四〇)	18歳	冬、倉重海(忠言)により教育の道を決意
文化二年(一八四二)	21歳	3月、長福寺学寮にて講学を開始
文化四年(一八四七)	23歳	7月、妹アリ京都にて没す(20歳)
文化五年(一八五〇)	24歳	8月、転居し成章舎と名づける
文化七年(一八五二)	26歳	8月、初めて月日評を作成する
文化八年(一八五三)	27歳	5月、弟謙吉(旭荘)誕生
文化九年(一八五四)	28歳	6月、桂林園を建築し塾を移転する、入門簿を作成
文化十年(一八五五)	29歳	菅茶山頼山陽に詩の評を請う
文化十一年(一八五六)	30歳	9月、合原十太(20歳)と結婚
文化十二年(一八五七)	31歳	8月、日記をつけ始める
文化十三年(一八五八)	32歳	2月、桂林園に移築し「咸宜園」と稱す
文化十四年(一八五九)	33歳	1月、頼山陽が来訪
文化十五年(一八六〇)	34歳	1月、頼山陽が移築し「咸宜園」と稱す
文化十六年(一八六一)	35歳	2月、頼山陽が来訪
文化十七年(一八六二)	36歳	1月、頼山陽が来訪
文化十八年(一八六三)	37歳	1月、頼山陽が来訪
文化十九年(一八六四)	38歳	9月、塩谷代官より人格に任じられる
文化二十年(一八六五)	39歳	3月、詩塾(初代東塾)を養子とする
文化二十一年(一八六六)	40歳	1月、伯父化没す(76歳)
文化二十二年(一八六七)	41歳	2月、弟謙吉(旭荘)を養子にする
文化二十三年(一八六八)	42歳	1月、官邸の難題(2)
文化二十四年(一八六九)	43歳	10月、書斎「淡窓」を造る
文化二十五年(一八七〇)	44歳	5月、浮城豊後高田に分校を開塾
文化二十六年(一八七一)	45歳	5月、肥前田代の藩校「東明館」で講義
文化二十七年(一八七二)	46歳	7月、九級の新月日評を考案
文化二十八年(一八七三)	47歳	3月、旭荘を建てて塾とする
文化二十九年(一八七四)	48歳	12月、招福祠を建てる
文化三十年(一八七五)	49歳	3月、旭荘を建てて塾とする
文化三十一年(一八七六)	50歳	12月、幕府より水世指字帯刀を許される
文化三十二年(一八七七)	51歳	6月、矢野純治書郵を養子とする
文化三十三年(一八七八)	52歳	9月、府内藩に出講
文化三十四年(一八七九)	53歳	4月、長崎に再遊し唐館を見学
文化三十五年(一八八〇)	54歳	5月、南塾・南樓が竣工
文化三十六年(一八八一)	55歳	1月、「万善簿」二万善完了
文化三十七年(一八八二)	56歳	5月、「万善簿」を建てる
文化三十八年(一八八三)	57歳	9月、孝之助(林外)を養子にする
文化三十九年(一八八四)	58歳	6月、塾生数「三三三」を記録する
文化四十年(一八八五)	59歳	1月、月日の階級を改訂
文化四十一年(一八八六)	60歳	9月、月日評に「真樞」の法を立てる
文化四十二年(一八八七)	61歳	8月、馬関下招福に出講
文化四十三年(一八八八)	62歳	9月、長崎に遊学
文化四十四年(一八八九)	63歳	12月、幕府より水世指字帯刀を許される
文化四十五年(一八九〇)	64歳	6月、矢野純治書郵を養子とする
文化四十六年(一八九一)	65歳	9月、府内藩に出講
文化四十七年(一八九二)	66歳	4月、長崎に再遊し唐館を見学
文化四十八年(一八九三)	67歳	5月、南塾・南樓が竣工
文化四十九年(一八九四)	68歳	1月、「万善簿」二万善完了
文化五十年(一八九五)	69歳	5月、「万善簿」を建てる
文化五十一年(一八九六)	70歳	9月、孝之助(林外)を養子にする
文化五十二年(一八九七)	71歳	6月、塾生数「三三三」を記録する
文化五十三年(一八九八)	72歳	1月、月日の階級を改訂
文化五十四年(一八九九)	73歳	9月、月日評に「真樞」の法を立てる
文化五十五年(一九〇〇)	74歳	8月、馬関下招福に出講
文化五十六年(一九〇一)	75歳	12月、幕府より水世指字帯刀を許される
文化五十七年(一九〇二)	76歳	6月、矢野純治書郵を養子とする
文化五十八年(一九〇三)	77歳	9月、府内藩に出講
文化五十九年(一九〇四)	78歳	4月、長崎に再遊し唐館を見学
文化六十年(一九〇五)	79歳	5月、南塾・南樓が竣工
文化六十年(一九〇五)	80歳	1月、「万善簿」二万善完了
文化六十年(一九〇五)	81歳	5月、「万善簿」を建てる
文化六十年(一九〇五)	82歳	9月、孝之助(林外)を養子にする
文化六十年(一九〇五)	83歳	6月、塾生数「三三三」を記録する
文化六十年(一九〇五)	84歳	1月、月日の階級を改訂
文化六十年(一九〇五)	85歳	9月、月日評に「真樞」の法を立てる
文化六十年(一九〇五)	86歳	8月、馬関下招福に出講
文化六十年(一九〇五)	87歳	12月、幕府より水世指字帯刀を許される
文化六十年(一九〇五)	88歳	6月、矢野純治書郵を養子とする
文化六十年(一九〇五)	89歳	9月、府内藩に出講
文化六十年(一九〇五)	90歳	4月、長崎に再遊し唐館を見学
文化六十年(一九〇五)	91歳	5月、南塾・南樓が竣工
文化六十年(一九〇五)	92歳	1月、「万善簿」二万善完了
文化六十年(一九〇五)	93歳	5月、「万善簿」を建てる
文化六十年(一九〇五)	94歳	9月、孝之助(林外)を養子にする
文化六十年(一九〇五)	95歳	6月、塾生数「三三三」を記録する
文化六十年(一九〇五)	96歳	1月、月日の階級を改訂
文化六十年(一九〇五)	97歳	9月、月日評に「真樞」の法を立てる
文化六十年(一九〇五)	98歳	8月、馬関下招福に出講
文化六十年(一九〇五)	99歳	12月、幕府より水世指字帯刀を許される
文化六十年(一九〇五)	100歳	6月、矢野純治書郵を養子とする

大正2年、門下生の長岡永郎によって描かれた絵図で江戸時代末期の姿が再現されています。当時は講堂や東塾がすでに失われていました。公益財団法人廣瀨資料館蔵